

観光地の景観デザイン

- 日 時 2005年 4月 22日(金) 19:00~21:00
- 会 場 JIA会館 小ホール
- パネリスト 下村 彰男 氏(東京大学大学院農学生命科学研究科教授、JUDI正会員)
松園 俊志 氏(東洋大学国際地域学部国際観光学科教授)
安島 博幸 氏(立教大学 観光学部観光学科教授、JUDI正会員)
- コーディネーター 小浪 博英 氏(東京女学館大学国際教養学部教授、関東ブロック幹事)
- スケジュール 19:00 開 会
19:00~ パネリストからの話題提供
20:10~ 会場参加者を交えたディスカッション
21:00 閉 会

■ 開催趣旨

現在、国内では、2010(平成22)年までに訪日外国人旅行者数を1,000万人とすることを目標に、政府、地方公共団体、観光産業関連企業等、様々な主体が連携し、観光立国の推進のため戦略的な取り組みが進められている。

このような中で、日本の観光地においては、地域の関係者が連携し、自己の魅力がどのような観光客層にアピールできるか、どうすれば期待する観光客層を引き付けられるのかを戦略的に考え、観光コンテンツを充実させたり、美しい景観を整備したり、地域ブランドを振興したりするなどの取り組みが求められている。

第6回ひとことサロンは、観光計画を先導する3人のパネリストを迎え、都市環境デザイン会議メンバーとともに、観光地の景観デザインのあり方、施策等について考えることを目的に開催した。

■ 概 要

(1) パネリストからの話題提供

1) 下村氏 「観光地の空間デザイン」

- ・例えば吉原では、S字カーブの橋で川を渡り、その先には大門をくぐって、異界性のある遊楽空間が用意されていた。これは吉原細見図から分かる。
- ・竹下通りと地蔵通りを比較すると、前者が凹タイプ(建物の中に客を引き込む)の若者向き商店デザインとなっている一方、後者は凸タイプ(路上にベンチやパラソルなどを出す)の老年向き街並みとなっている。
- ・杉林を見ると、ヘクタールあたり3000本程度の日田(大分)の杉林と、1万本程度の吉野(京都)の杉林では景観が全く異なる。前者は整然とした堅さがあり、後者は雑然の暖かさ

を感じさせる。

- ・高山、津和野、沖縄の町を見ると、民家、三州瓦、屋上水タンクなどそれぞれに景観上の特徴があるが、地元の人たちは多分気づいていない。このように、景観を生活から分離した異界を作るよりは、生活の中に取り込まれた景観の方がよい。

2) 安島氏 「川越に見る観光地の景色と観光地のあり方」

- ・川越の街並みは時の鐘、大正ロマン通り、蔵の町など多くの工夫はあるが、そこへのアプローチ道路は電線、看板、フジカラーフィルムの幟など酷いものだ。ドイツの農家民宿などの景観と比べると日本の景観は美しいかと問われれば NO といわざるを得ない。
- ・リチャード・バトラーの観光地発展段階曲線でいえば、日本の多くの観光地はもう成熟を乗り越えて衰退に向かっているとさえ思える。この時期にはオルゴール店、ガラス細工店、蠟人形店、骨董屋などが現れることが多い。
- ・それは、無自覚、没個性、外圧による地域の個性と景観の破壊によるものであり、差別化や優越性を大切にしなければならない。これを差異化された記号と考えることができる。
- ・100名の識者による温泉評価をしたら、乳頭温泉がトップで、新幹線のある温泉地は軒並み低位であった。これは、交通が便利すぎて、行ってきても自慢ができないからであろう。
- ・我が国はインバウンド倍増などを図るには、その準備が国内でできてなく時期尚早だ。

3) 松園氏

「インドネシア国アマンジオ（ボルブドール）にみるサステイナブルツーリズム」

- ・1泊7万円の高額ではあるが、その演出は見事。エントランスの坂上から玄関の天窓を通じて遠くにボルブドールの遺跡が見える。象に乗って棚田や村の中を見物したり、ホテルの塀は自然石でできていたり、その前庭に人工の棚田を創って既存の棚田との境界をなくして景観上に配慮している。内装もライムストーンをふんだんに使ってあり違和感がない。観光客を地元の生活者と同様に扱ってくれる。
- ・フランスでは貴族のリゾートから始まったが、ラングドック・ルシオンでは中古リゾート・マンション1LDKマリーナ付が400万円くらいであり、大衆リゾートができあがっている。
- ・中国の観光客は、多くは欧州に行って日本に来ないが、それは物価が高いことと、日本に行っても滞在国が一国であり、地元で自慢ができないからであろう。

(2) 会場参加者を交えたディスカッション

～観光の概念の変化、土地とのつきあいのありかた、中国からのマス観光への対処、豊かさのとりえ方など、多くの課題にどう対処したらよいか～

下村氏：自由時間対応型というか、一種のファンを作っていくような観光が大切になる。

安島氏：すっきりはしないが、何らかの地域の特徴があればそれなりに立ちゆくと考える。

松園氏：高価格にして人数制限をしたり、何らかの受け入れ制限による環境破壊防止策が必要である。また、自然を上手に活用し、環境と共生することが大切である。例えば、棚田はそれ自体がダム役割を果たしている。また、日本ではリゾートに対する政府の考え

方が陳腐であり、ランド・デザインが無かった。リゾート法はもう役に立たない。

～観光とは所詮、偽物を見せることか～

下村氏：大いにだまされたいいのではないか。TDLだってその一環である。

安島氏：テーマパークはすぐに飽きられるが、長い歴史に基づくものは長持ちする。

～掛川、長浜、彦根などもふくめ、伝建群を使い過ぎたような景観形成は必ずしも感心しない。
また、お祭りなどのイベントやカメの産卵なども景観の一部と考えられる。このような事実
をどう考えるか～

下村氏：生活から出てくる風景はそれなりに収まりがある。

安島氏：川越などでもイベントが地域の一体化に役立っている。

松園氏：アマンジオに見たとおり、来訪者数を小規模施設・小敷客室に制限したり、自然をうまく活用してサステイナブルなツーリズムを模索したり、これからやるべきことは多い。

(3) まとめ（小浪氏）

- ・景観デザインの議論というよりは、観光地そのものの議論が多かった。
- ・生活の一部が観光と解け合っていることが重要であり、それを地元で自覚させる必要がある。
- ・人、生物、イベント、地域など、それぞれがうまく機能して異界性を発揮させることが観光地の景観デザインに求められているようだ。